

～日本最大級の貯砂量を有する砂防堰堤～

本宮砂防堰堤

重要文化財 常願寺川砂防施設（本宮堰堤）



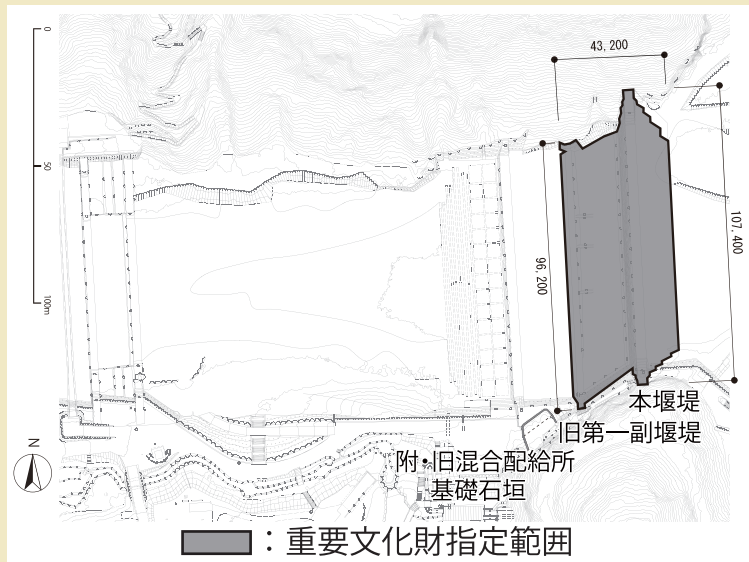
国土交通省 北陸地方整備局 立山砂防事務所

重要文化財 常願寺川砂防施設（本宮堰堤）の指定

重要文化財 常願寺川砂防施設(本宮堰堤)

常願寺川砂防施設は、立山連峰から富山湾に注ぐ我が国屈指の急流荒廃河川、常願寺川に築かれた砂防施設である。このうち、本宮堰堤は常願寺川の中流に位置し、平野部の手前で土砂の流出防止や調節により災害を防ぐことを目的として建設された、我が国最大級の貯砂量を有する重力式コンクリート堰堤である。

平成11年（1999年）8月に登録有形文化財に登録され、平成29年（2017年）10月20日に国の文化財審議会の答申を受け、平成29年11月28日（告示）により重要文化財に指定された。



【文化審議会答申】

名称：常願寺川砂防施設（本宮堰堤）
 構成：本堰堤、旧第一副堰堤、
 附・旧混合配給所基礎石垣
 所在地：富山県富山市小見字家ノ高割
 富山県中新川郡立山町芦峯寺字下林
 所有者：国土交通省
 （北陸地方整備局立山砂防事務所所管）

指定理由：常願寺川砂防施設は、上流と中流でそれぞれ土砂打止を担う大規模な基幹砂防堰堤と、水源崩壊地での土砂生産を抑制する支溪の階段式堰堤により、我が国屈指の急流荒廃河川である常願寺川の水系を一体的に治め、その後本格化する水系全体に及ぶ治水対策の礎となった施設であり、我が国治水史上、価値が高い。また、荒廃河川特有の不利な地盤条件を克服して、短期間で完成した大規模な貯砂堰堤と狭溢な谷筋に堰堤が連なる階段式堰堤は、昭和前期における砂防施設の技術的達成度を示すものとして重要である。近代砂防工事の機械施工に係る遺構とともに、崩壊地に面的に整備された山腹工に係る構造物が現存することも貴重であり、指定名称を白岩堰堤砂防施設から常願寺川砂防施設に改め、既指定の白岩堰堤と併せて保存を図る。

本宮砂防堰堤 建設の歴史

和暦	安政5年	明治24年	明治39年	大正13年	大正15年	昭和9年	昭和9年	昭和10年	昭和11年	昭和12年	昭和24年	昭和47年	昭和48年	昭和60年	昭和62年	平成11年	平成29年
西暦	1858	1891	1906	1924	1926	1934	1934	1935	1936	1937	1947～1972	1973	1985～1987	1999	2017		
主な出来事	安政の大地震	デ・レーケ 常願寺川改修計画を立案	富山県 常願寺川砂防に着手	内務省による河川改修のための調査に着手	常願寺川砂防工事が国直轄事業として告示される	常願寺川改修計画がまとまる	7月の出水により、大正3（1914年）以来の大被害となる	着手前年の出水をうけて、富山県からの受託工事として	内務省が常願寺川直轄河川改修事業に着手	本宮砂防堰堤完成	（この間に第三副堰堤、第四副堰堤を施工）	復旧工事を実施 幾多の洪水により被災した、第二副堰堤、第四副堰堤の	河床低下に対処するため、第五副堰堤を設置	第一副堰堤を設置 旧第一副堰堤が洪水により被災したため、下流に現在の		本宮砂防堰堤 登録有形文化財に登録	常願寺川砂防施設(本宮堰堤)として重要文化財に指定

本宮砂防堰堤の施工の様子

本宮砂防堰堤は富山県からの委託工事として内務省が施工したもので、限られた予算内、また厳しい気象条件に制約された期間の中で、掘削量約3万 m^3 、築立積約5万 m^3 という大規模な工事を行わなければならなかった。

このため、最盛期には、昼夜3交代でコンクリート打設を行い、計画では200 m^3 /日のコンクリート打設を最高560 m^3 /日で行うことで、わずか2年で堰堤を完成させた。



右岸下流部から見た本宮砂防堰堤の着工予定地



コンクリート分配タワーとシュート



トロッコによる骨材の運搬



最盛期の工事状況



練石積みによる堰堤表面



現在の本宮砂防堰堤

立山砂防事務所の初代所長である内務省技師の赤木正雄は、常願寺川の砂防事業の直轄化にあたり、限られた事業費で十分な効果を得るため、「当面行う砂防工事としては、上流部に砂防堰堤を設け、溪岸を安定させ、溪床堆積物を扨止するとともに、流下土砂を捕捉する計画で始める」(※1) ことを計画した。

一方、内務省技師 蒲 孚は、「まず最下流の好地点に出来るだけ高い堰堤を築設して応急策とし、次に下流の改修を行い、また同時に上流の砂防工事を実施」(※2) することも重要と考えた。この蒲の考え方について、立山砂防事務所の二代事務所長である内務省技師の高橋嘉一郎も「常願寺川のような急流河川で水源地付近の山間地域の砂防工事だけを行って土砂災害に対応することは難しい～中略～よって、急流河川では上流の山間地域だけでなく、本川沿いにおいて適切な砂防堰堤を設置し、上流からの流出土砂を抑止しなければならない。このように河川全体で対応することで、下流域の河床の安定を確保することが出来る。」(※3) として、本宮砂防堰堤の重要性を認識していた。

こうして常願寺川の上流部の立山カルデラの出口には白岩砂防堰堤が、また中流部には本宮砂防堰堤という2つの重要な基幹砂防堰堤が作られた。この2つの基幹砂防堰堤は、完成から約80年を経た現在も常願寺川流域を土砂災害から護り続けている。

※1 常願寺川沿革誌、1962.3、富山工事事務所

※2 蒲孚、常願寺川の治水に就て、1941.9、水利と土木、第14巻、第9号

※3 高橋嘉一郎、常願寺川本宮堰堤に就て、1939.4、水利と土木、第10巻、第4号

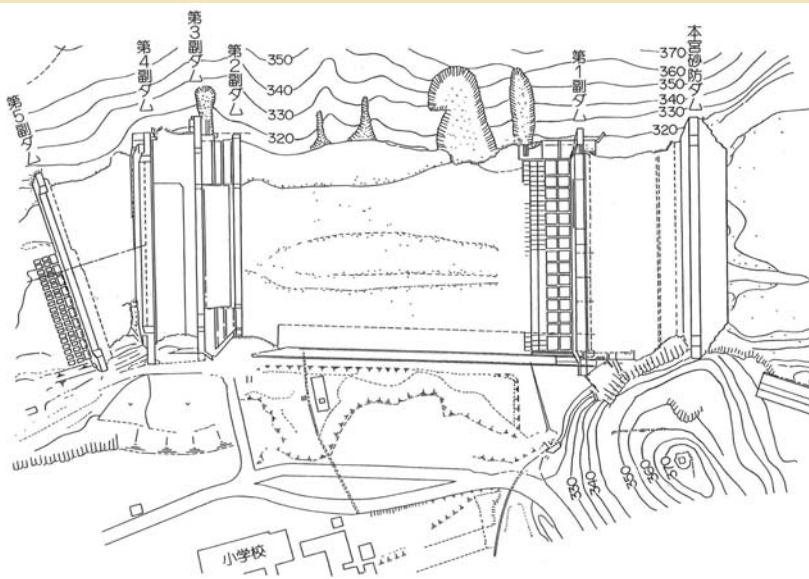
保存管理の基本的な考え方

本宮砂防堰堤は、常願寺川砂防の基幹施設として、富山平野を土砂災害から守る極めて重要な現役の防災施設であることから、防災施設としての機能を確実に保持することを最優先とした上で、重要文化財としての価値も損ねることがないように施設の特徴を踏まえた管理に努めるものとし、保存管理に際しての基本的な考え方を次のように定める。

本宮砂防堰堤の保存管理の基本的な考え方

1. 防災機能の保持を第一とする
2. 極力原形を保持する
3. 構造・材料に着目した区分での保存を行う
4. 対応の迅速化、簡素化を行う

本宮砂防堰堤の諸元



所在地	右岸	富山県中新川郡立山町 芦峯寺字下林
	左岸	富山県富山市小見 字家ノ高割
河川名	常願寺川水系常願寺川	
工事年月日	着工	昭和10年(1935年)4月1日
	竣工	昭和12年(1937年)3月31日
総事業費	548,020円	
起業者	内務省新潟土木出張所 常願寺川堰堤工事事務所 (富山県委託工事)	
堰堤	高さ	22.0 m
	長さ	107.4 m
立積	49,621m ³	
形式	重力式粗石コンクリート堰堤	
流域面積	193.1 km ²	
貯砂量	5,000,000 m ³	



本宮砂防堰堤位置図



国土交通省北陸地方整備局 立山砂防事務所

〒930-1405 富山県中新川郡立山町芦峯寺ブナ坂61 (千寿ヶ原)
TEL : 076-482-1111 FAX : 076-482-1101
ホームページ <http://www.hrr.mlit.go.jp/tateyama/>
E-mail info@tateyamasabo.go.jp

水谷出張所

〒930-1406 富山県中新川郡立山町芦峯寺字松尾 (水谷)
TEL : 076-482-1133 (夏期)